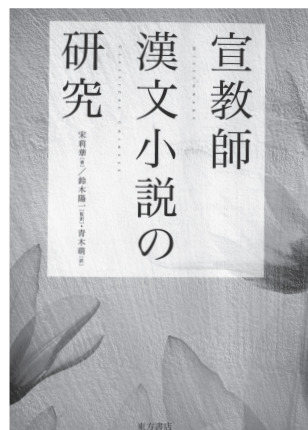


宋莉華 著

『宣教師漢文小説の研究』

東方書店、2017 年、334 頁

孫 安石



昨年の暮れに学校の廊下で同僚の鈴木陽一氏からぜひ書評として取り上げてほしい、という言葉と共に一冊の本を頂戴した。それが、本書評で取り上げる宋莉華教授の大著『宣教師漢文小説の研究』であった。宋莉華教授とは、短い間であったが2012年から1年ほど神奈川大学で一緒に時間を過ごしたことがあったが、それが理由で本書評を引き受けたわけではない。

実は、それよりも先に『伝教士漢文小説研究』（上海古籍出版社、2010年）を通して、氏の優れた研究成果に触れる機会があった。しかし、同書が取り上げるテーマは、日本の中国研究ではなじみが薄い宣教師が書いた漢文小説であったことからなかなかまとめて著書を精読する時間を作ることができなかった。ところが、その日本語版の翻訳が用意されているのであれば、これはありがたい。筆者の専門である歴史を離れて、文学というやや畑違いの冒険を試みることも良いのではないか、と思った。もちろん、予測は大当たりで、本書は、期待通り、多くの新たな知見を示し、中国近現代史の研究に向けた新たな可能性についても示唆に富む内容を提示してくれた。

以下、本書の目次にそって、内容を紹介しながら、幾つか感じたことを追記し、宣教師漢文小説という新たな研究分野の開拓に臨む氏の業績が一人でも多くの読者に届くことを願いたい。

目次

日本語版への序文（宋莉華）

序文（鈴木陽一）

序論 宣教師漢文小説研究の現状

第一章 プレマールと初期のカトリック宣教師による小説『儒交信』

第二章 早期のキリスト教の漢語定期刊行物

第三章 最初に宣教師漢文小説を書いた宣教師のミルン

第四章 ドイツ人宣教師ギュツラフの小説創作と評価

第五章 『中国叢報』が翻訳紹介した中国古典小説及び宣教師に対する影響

第六章 バーンズと『天路歷程』の訳本について

第七章 街頭布教家のグリフィス・ジョンおよびその漢文小説

第八章 リチャードと『回頭看紀略』の翻訳紹介

第九章 宣教師と中国の近代児童文学の萌芽

第十章 一九世紀宣教師小説の文化解読

付録 一九世紀西洋人の漢語読本における小説

あとがき（青木萌）

まず、「序論 宣教師漢文小説研究の現状」では、欧米の宣教師によって中国語で書かれた中国語の

小説が登場した背景には、西洋の宣教師が中国での布教のために用いた文化適応の過程が色濃く反映されていると指摘し、そこで選ばれたのが中国の白話小説で、白話小説の通俗的で臨場感のある表現は、中国人の読者に有効であっただけでなく、外国人（宣教師を含む）が中国語を学習するためにも大いに役に立った、という。そして、本書が取り上げる『儒交信』の対話体の文型やイソップ寓話集、そして、『天路歷程』の翻訳、女性の宣教師による中国児童文学の誕生などはいずれもその時代に即した背景と理由によって生み出された産物であることが述べられている。しかし、この宣教師漢文小説という研究分野は、(1) 帝国主義と宗教的色彩の背景、(2) 資料の散逸などの理由で中国の正統な文学史においては正当に評価されることはなく、今に至っている、とする。

「第一章 プレマールと初期のカトリック宣教師による小説『儒交信』」は、17世紀末、中国に到着したフランスのイエズス会のカトリック宣教師のプレマールが稀にみる才能に恵まれ漢学を身につけ、通俗小説、戯曲は勿論、古典の『易経』などの知識までを取り入れた諸書の刊行に力を入れ、『漢語礼記』、『経伝論』などを刊行した後、その代表作である『儒交信』を世に出す過程を紹介している。そして、プレマールが白話小説と問答体という形式をもって『儒交信』を著述した理由は、対話体という記述が、旧約聖書とキリスト教の精神を中国人に伝える時により直観的で要点を明確にして伝えることができたためでないか、と推察している。また、プレマールのもう一つの功績が元曲の『趙氏孤児』をフランス語に翻訳したことにあることにも触れている。

「第二章 早期のキリスト教の漢語定期刊行物」は、キリスト教宣教師によって創刊された定期刊行物の『察世俗毎月統記伝』（マラッカ発行、1815年）、『特選撮要毎月紀伝』（バタビア発行、1823年）、『東西洋考毎月統記伝』（広州発行、1833年）の創刊に至る経緯と内容について紹介している。そして、これらの雑誌の内容が時代を下って行くに連れ、宗教や道德の問題ではなく、一般民衆と貧しい労働者が理解しやすい通俗性が強調され、地理、政治、軍事、交通、天気などの題材が雑誌の記事として選択されているということを指摘している。これらの定期刊行物の歴史は漢文小説という範疇だけではなく、中国の近現代の新聞・メディア史の誕生との関係においても注目されてなければならないことは言うまでもなからう。

「第三章 最初に宣教師漢文小説を書いた宣教師のミルン」では、ロンドン会の宣教師ミルンが著した白話小説で、中国の伝統的な章回小説の形式を借りた漢文小説である『張遠両友相論』の画期的な意義を分析している。同書は、儒教の思想を取り入れた内容でキリスト教の教理を分かりやすく説明し（問答体）、一般民衆は勿論、一部の知識人にも受け入れられ、1817年に発表されてから20世紀初期に至るまで多くの版本が確認される最も長期間に亘り流布した小説で、宋氏の分析によれば、「漢語小説の作成はこの時から新たな領域へと進み、宣教師の介入は、中国の伝統小説の創作に危機と契機を同時に与え、中国小説の古代から近現代への過渡期にその変化を激しくする役割を果たした」という。

「第四章 ドイツ人宣教師ギュツラフの小説創作と評価」は、欧米の宣教師の中でも多くの漢文小説を残した人物の一人あるギュツラフが中国の伝統的な小説の形式を借り、『大英国統志』、『聖書注疏』などの優れた著作を残す一方、西洋文化優越論、イギリス文化優越論という時代の束縛から逃れることはできなかった、ことが紹介されている。しかし、彼が多くの中国の歴史物語を渉猟し、『三国史通俗演義』を中国の最高峰の作品の一つとして讃え、科举試験の意味を正確に理解し、多くの儒教の經典を作品の中に取り入れている点は注目に値する才能であることを指摘している。

「第五章 『中国叢報』が翻訳紹介した中国古典小説及び宣教師に対する影響」は、1832年に広州で創刊された月刊の定期刊行物を取り上げている。この英語による定期刊行物には、多くの中国古典小説が翻訳、掲載されたことで、西洋の学術世界に中国の知識体系を伝えた重要な役割を担っていたことが指摘された。『中国叢報』は中国の歴史小説を高く評価し、『三国史演義』、『平南後伝』、『南宋志伝』などの歴史小説を多く掲載する他、神仙、道教、鬼神などに関する各種の論考を多く掲載し、その発行部数は1000部を越え、中国、アメリカ、イギリス、シンガポール、マニラ、印度などに広く、伝播し、名実共に中国を代表する英語の学術刊行物としての地位を築いた。

「第六章 パーンズと『天路歷程』の訳本について」は、宣教師によって翻訳された書物の中で、中

国は勿論、日本、韓国などにもその版本が見られ、東アジアの布教を理解する上においても重要な手がかりを提供してくれる『天路歷程』の翻訳の成り立ちとその伝播、影響について検討している。上海で発行された『教会新報』の記述によれば、『天路歷程』を翻訳したバーンズは、20年以上、中国での伝道活動に従事するなかで、北京語は言うまでもなく、厦門方言、福州方言などをも身につけ、『天路歷程』以外にも数多くの著述を手かけたという。バーンズは、墮落した世界を抜け出し、キリスト教への帰依を求める『天路歷程』の内容を、中国の通俗文言を用いながら原作者の視点を崩さず、中国人にはまだ馴染みが薄い私を主語とした「一人称」の叙事を維持した。後に発行された官話版においてもこの一人称の形式が継承されたのは言うまでもない。バーンズの翻訳による『天路歷程』は、聖書の内容を各処に散りばめた布教のための書籍としても、そして、寓言小説としても多く人々に歓迎され、その影響は中国だけに限らず、日本や韓国などにも波及するに至ったのである。

「第七章 街頭布教家のグリフィス・ジョンおよびその漢文小説」は、中国各地で50年以上に亘り宣教活動を展開したグリフィス・ジョンと彼が翻訳した『紅侏儒伝』と『引家当道』などについて論じている。グリフィス・ジョンの伝記によれば、彼は大衆に向けた布教を重んじ、街頭の布教家と称賛されたが、彼はその他に著述家の一面をもっている。とくに、ロンドン会の助成を得て中国内陸の漢口に設立された聖教書局との関係は密接で、後に彼の代表作として数えられた『紅侏儒伝』もこの聖教書局で刊行されたものである。また、グリフィス・ジョンは、中国キリスト教徒の理想的な生活を示した小説といわれる『引家当道』の著述も発表している。この作品は、主人公の李が、墮落の道に落ち、金銭を使い果たし、子を守るまでに困窮した末、キリスト教に出会い、困難を乗り越える内容で、宋氏は、この作品を宣教師原作による漢文小説の中で最も作品性が優れていると高く評価している。

「第八章 リチャードと『回頭看紀略』の翻訳紹介」は、とくに、清末の政治改革に関連し活躍した宣教師のリチャード（李提摩太）の著述活動について述べている。宣教師のリチャードは李鴻章、張之洞などの清末の中国政治家と親しい交流関係を持った人物で知られるが、ここでは、彼ら翻訳したベラミーの小説『百年一覚』が中国のユートピア小説に与えた影響に注目すべきであるとする。即ち、梁啓超によって『清議報』に掲載された「新中国未来記」という小説が描写する無人島の学校、工場、議院、平等、自由という概念は『百年一覚』の取り上げるユートピアの世界と深い関係があると考えられるからである。

「第九章 宣教師と中国の近代児童文学の萌芽」は、一九一九年の五四運動時期を前後した時期に成立したとされる中国近代の児童文学に大きな影響力を与えた宣教師の活動を取り上げている。宋氏は、その最初の事例として、宣教師によって多くの児童向けの福音小説が翻訳されたことを紹介している。中でも注目すべきは、一八七五年を前後した時期に宣教師ファーナム（J. M. Farnham）の編集によって児童向けの雑誌『小孩月報』が出版されたことは、画期的なできごとである。その後は、児童向けの作品は一時、隆盛を極め、児童向けの『小天路歷程』が刊行されるほか、その内容を脚色した類似作品が発行されるにいたるとする。その過程で女性の宣教師のマクギリヴェイ、ホワイトなどが目覚ましい活動を展開したことも注目すべきできごとであった。もう一つは、欧米の『イソップ寓話集』、『アンデルセン童話』、『ロビンソン漂流記』、シェークスピアの物語集などが宣教師によって次々と翻訳された。そして、上記のアメリカの女性宣教師のホワイトが、中国で初めての女性を読者とした専門の雑誌『女鐸報』を刊行し、確認されただけで20作品以上の作品を創作、翻訳し、中国の女性と児童文学に大きく貢献したことは特筆に値する、ことが紹介されている。

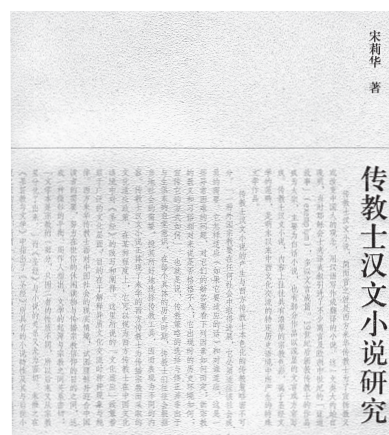
以上、本書の内容について簡単な紹介を試みたが、著者の宋莉華氏が繰り返し指摘しているように、宣教師による漢文小説の創作と翻訳は、欧米と中国の文化摩擦、または文化適応の壮大な一つの実験であったといえるものであった。近年、中国におけるキリスト教や宣教師の活動に関する研究は、目覚ましい研究成果が報告され、例えば、キリスト教と教育（大学、女子）、医療、出版、帝国主義と文化相対主義などで様々な論考が発表されている。本書は恐らくキリスト教と小説についての現段階においての最も高い研究水準を紹介するものであることに間違いはない。

もう一つ、本書の訳者と監訳を務めた二方の苦勞についてもひとごとと触れなければならない。実は、

中国語を日本に翻訳するときに最も困難な作業の一つが欧米人の氏名や関連事項を一々確認しながら中国語から日本語のカタカナ表記に直さなければならない、という二重翻訳の問題がある。本書が欧米の宣教師の活動を論じるものであるから大量の欧米人の氏名が登場するのは避けがたい。この困難を乗り越えるには根気よく付き合う以外に方法はないが、その努力の痕跡は注と訳注に大いに反映されているので、その苦労も称賛に値する。

最後に感じたことを一つ記す。本書を精読しながら感じたことの一つは、宣教師が中国各地の出版社で書籍を出版したことは各論では部分的に紹介されているが、宣教師、または教会によって運営された中国全域における出版社の状況、その経営と財政的な背景に関する論考がほしかった。また、近年のウェブサイトへの研究蓄積と公開は著しく進んでおり、中国のキリスト教については、Biographical Dictionary of Chinese Christianity（華人基督教史人物辞典、<http://www.bdcconline.net/en/>）というものが公開されている。もちろん、今後さらに充実したものになって行くと思うが、人物別、会派別、地域別、時代別、著作別の検索が可能であり、本書を読むときには大いに参考になった。以上、書評者の読み違いがあった箇所があるかも知れない。あとは読者のみなさんがぜひ本書を手にとって、本書の豊かな知見に直接触れることを大いに期待したい。

（そん あんそく 所員、神奈川大学外国語学部教授）



【図1】 宋莉華著、中国語版の『伝教士漢文小説研究』（上海古籍出版社、2010年）